

「クラーク博士と音楽の夕べ〜若き心に響けクラークキー・スピリット〜」開催

第4回「クラーク博士と音楽の夕べ」を10月1日(水)に札幌市時計台ホールで開催しました。この日は初秋の爽やかな天候に恵まれ、札幌市や札幌近郊からお越しのクラーク博士に関心のある方や旅行者も立寄られ、総勢112名の参加者が熱心に聞き入っていました。



講演会に先立ち、クラーク会理事長藤田久雄から、「クラーク博士馬上像」建立プロジェクト(目標年次2026年)について、進捗状況の説明とご支援のお願いがありました。講演では、「クラーク博士と新渡戸稲造の教育精神」と題し、博士研究の第一人者である藤田正一北大名誉教授から講演がありました。講演では、まずクラーク博士の教育思想として、教育重視と人間を造る教育、個人の尊重と民主主義、利他博愛の精神など、クラーク博士が教育を重んじた経緯が詳しく述べられました(要旨、後段)。また、クラークの教えを実践した新渡戸稲造の教育思想として、学問より実行、人格主義教育、人生の目的は地位や名誉や富を得ることではなく、心豊かな人間として完成することにあるとの考えを基に絶対的平和主義の考えについて解説がありました。教育は心を変えることであり、人間をつくることであるという人格主義教育の重要性について、約1時間にわたって解説して頂きました。

講演の後のダンディ・フォー(メールカルテット)によるコンサートでは、男声コーラスのハーモニーを楽しんで頂きました。曲目「ボーイズ・ビーター・アンビシャス、あの鐘を鳴らすのはあなた」ほかが演奏され、参加者全員で「時計台の鐘」を合唱し、コンサートは大いに盛り上がりました。



クラーク博士と新渡戸稲造 — 人格をつくる教育の流れ —

藤田正一(北海道大学名誉教授)

1876年、アメリカ建国100年の年、クラーク博士は日本の近代化が急速に進むなか、当時の辺境の地であった札幌に赴いた。札幌農学校で彼は、単なる技術移転にとどまらず、リベラルアーツ教育を通して人格の涵養を重視する「人間をつくる教育」を実践した。

来日15年前、クラークはアメリカ南北戦争に北軍の大佐として従軍していた。奴隷解放のために戦った経験を通じ、北軍が大義としたアメリカ独立宣言の自由・平等・自主・独立の精神を身に刻み、弱者に寄り添う正義感と「正義は必ず勝利する」という確信を自らの体験として確立した。この精神を彼は生徒たちに伝えたのである。彼の教育精神は「Be Gentlemen」「Be Ambitious」という言葉に象徴される。彼は学生たちに、自律性や責任感を備えた確固たる個の確立を求め、金銭や地位、名声ではなく、社会への奉仕と、自らの人格完成のために高い目標を掲げ努力することを求めた。

新渡戸稲造は札幌農学校二期生としてクラーク退任後に入学したが、学校に残るアメリカ人教師や一期生を通じて、その精神を深く受け継いだ。新渡戸が「To doよりTo be」と語り、業績より人物を重んじた姿勢は、クラークの人格主義教育を自らの生き方の中心に据えた証である。また、「人生の目的は地位や名誉ではなく、心豊かな人間として完成することにある」という言葉には、クラークの教育精神を日本的倫理の中で深化させた新渡戸の思想が息づいている。

新渡戸はさらに、リンカーンの言葉「何人にも悪意を抱かず、すべての人に慈愛を」を生涯の指針とし、弱者に寄り添う平等主義を貫いた。加えて、クエーカーの絶対平和主義に根ざした国際平和思想は、太平洋会議での演説に端的に表れる。「異なる国民相互の個人的接触こそ世界に計り知れぬ効果をもたらす」と述べ、国境を越えた心の交わり—「遠友」の精神—を提唱した。ここには、クラークが説